

真弓の症状が和らぎ、前途に薄明かりが差し始めた浦部夫妻だったが、1992年、再び絶望のふちに立たされることになる。

長女、翠の急死！

ヘルペス脳炎と診断されたが、詳しい原因は分からなかった。13歳だった。



第4部・有機とともに

「なぜ、どうして」「難病の母から生まれたせい？」。思い詰める日々。せっかく改善していた病状が悪化し狭心症まで併発した。生きる意欲をなくした。

「宝石のよう」

93年春、真弓はテストを

受ける次女に付き添い上京した。会場前の湯島天神で市が立っていた。門前の露天商の前をふらふらと歩いていると、ブルーシートで申し訳程度のコメや稲穂を並べている男がいた。

深紅の芒に見た希望

赤褐色や漆黒のコメ粒が「宝石のよう」にきれいだった。

「古代米？。こんなものに高い金出して」。帰宅した真弓に修はあきれた。それでも、男が説明した通り白米に混ぜて炊いてみた。半月後、ようやく手に入れたわずかばかりの古代米の種籾が、夫妻の田で芽を出した。

古代米

ちりちりと陽が照りつける夏の日。修が出勤中、田の水の見回りに来た真弓が、おもむろに泥田に足を踏み入れ、コナギやカヤツリグサなどの雑草を取り始めた。農作業は医師に止められていた。

「子を亡くしたというのに、自分をいたわってまで生きる意味がどこにあるのか」「自分のために昼夜なく田んぼにぬかずく夫の、たとえネコの手ほどであっても助けになりたい」。錯綜した思いが込み上げた。稲を絞め殺そうとするかのように株元にまとうりつくコナギ。「むしり取るたびに、稲がほっと息をつくのが聞こえるような気がした」

真弓はその後も修に内緒で草取りを続けた。

病の症状は次第に和らいでいった。8月、赤米の深緑の稲が穂を付けた。穂先を、深紅の芒が炎のように彩っていた。

食養生のために

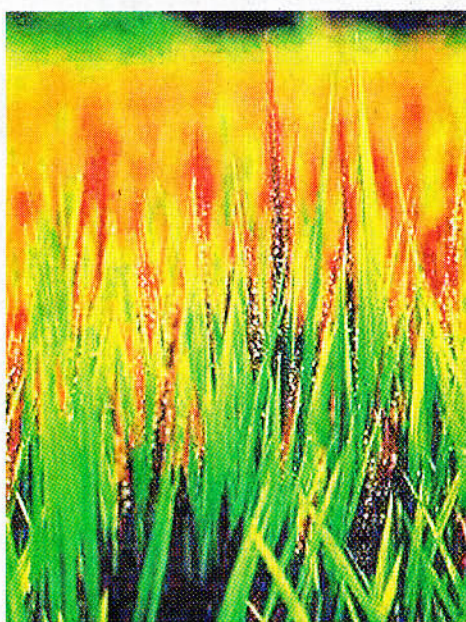
真弓の食養生のために作り始めた古代米。必要な分以外は売って生活の足しにしようと、全国の有機食品取扱店にサンプルを送ったところ、10店ほどから注文が入った。翌年は口コミで古代米を知った人から注

文。顧客は年々増えていった。

長女の他界から20年がたち、風評被害という新たな試験にさらされている浦部夫妻。1月、支援してくれている顧客へ、農業への変わらぬ姿勢を示す手紙を送った。表題は「もう一つの原点」。長女を失ったことを初めて明かした。

手紙はこう締めくくられている。

「有機農業をスタンダードな農法として根付かせること、一人でも多くの若者の就農を支援して地域農業を再生することなど課題はまだ途中です。日暮れて道遠しの感もありますが、残された人生を生きることが守りきれなかった娘の人生をも生きること。命ある限り前に進みたいと思います」



浦部農園で穂を付けた赤米。炎のような穂を見たとき、真弓は、自分の心にも命の火がともったような気がしたという

(敬称略)